

デーヴォ ガイド



2024.6.24-30

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

LTG ガイド

- ①お互いへの感謝と誉めることを分かち合しましょう。(2~3つ)
- ②1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディボーションの分かち合い(なるべく短く)
- ④預言の祈り(主の御心を宣言して祈り)をします。

LTG Guide

セル ガイド

- ①祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様があがめます。
- ②互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合しましょう。
- ③ディボーションの分かち合いをします。
- ④セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族でいいのです。

- ①この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと?
- ②この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか?(または誉めたいですか?)1つだけ。
- ③聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか?
- ④互いの必要のために祈りましょう。

Cell Group Guide

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

①神のみこころは?(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか?(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか?(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか?)

④この世にあって何を実践しますか?

Family Worship

3:13 エリシャはイスラエルの王に言った。「私とあなたの間は何の関わりがあるでしょうか。あなたの父の預言者たちや、母の預言者たちのところに行かれたらよいでしょう。」すると、イスラエルの王は彼に言った。「いや、モアブの手に渡すために、この三人の王を呼び集めたのは、【主】だ。」

3:14 エリシャは言った。「私が仕えている万軍の【主】は生きておられます。もし私がユダの王ヨシャファテの顔を立てるのでなければ、私は決してあなたに目も留めず、あなたに会うこともしなかったでしょう。」

3:15 しかし今、豎琴を弾く者をここに連れて来てください。」豎琴を弾く者が豎琴を弾き鳴らすと、【主】の手がエリシャの上に下り、

3:16 彼は次のように言った。「【主】はこう言われます。『この涸れた谷にはたくさんの水がたまる。』」

3:17 【主】がこう言われるからです。『風を見ず、大雨を見なくても、この涸れた谷には水があふれる。あなたがたも、あなたがたの家畜も、動物もこれを飲む。』

3:18 これは【主】の目には小さなことです。主はモアブをあなたがたの手に渡されます。

3:19 あなたがたは、城壁のある町々、立派な町々をことごとく打ち破り、すべての良い木を切り倒し、すべての水の源をふさぎ、すべての良い畑を石をもって荒らすでしょう。」

3:20 朝になって、ささげ物を献げるころ、なんと、水がエドムの方から流れて来て、この地は水で満たされた。

3:21 モアブ人はみな、王たちが自分たちを攻め上って来たことを聞いた。よろいを着け

ることができる者はすべて呼び集められ、国境の守備に就いた。

3:22 翌朝早く起きてみると、太陽が水の面を照らしていた。モアブ人は、向こう側の水が血のように赤いを見て、

3:23 こう言った。「これは血だ。きっと王たちが切り合って、同士討ちをしたに違いない。さあ今、モアブよ、分捕りに行こう。」

3:24 彼らがイスラエルの陣営に攻め入ると、イスラエルは立ってモアブ人を討った。モアブ人はイスラエルの前から逃げた。イスラエルは攻め入って、モアブ人を討った。

3:25 さらに、彼らは町々を破壊し、すべての良い畑にだれもが石を投げ捨てて石だらけにし、すべての水の源をふさぎ、すべての良い木を切り倒した。ただキル・ハレセテにある石だけが残ったが、その町も石を投げる者たちが取り囲み、これを打ち破った。

3:26 モアブの王は、戦いが自分に不利になっていくのを見て、剣を使う者七百人を引き連れ、エドムの王のところへ突き入ろうとしたが、果たせなかった。

3:27 そこで、彼は自分に代わって王となる長男を取り、その子を城壁の上で全焼のささげ物として献げた。このことのゆえに、イスラエル人に対する激しい怒りが起こった。そこでイスラエル人は、そこから引き揚げて、自分の国へ帰って行った。

ヨシャパテが主のみこころを求めたので、主は水を与えることで報いてくださいました。また敵が勘違いをして不利な戦いをしかけてきたのも、人の計画ではなく主によるものです。

モアブの王は偶像の神に王子を焼いてささげましたが、この民の心はこの残酷な邪教によって曇っていたので、王がしたことよりも自分たちを打ち負かしたイスラエルを恨みましました。

創造主にして救い主である主に対する信仰と、偶像とはこれほどの違いがあるのです。偶像異教に妥協したイスラエルの王たちに彼わらずに、確かな信仰を歩みましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



25日 火曜

列王Ⅱ



4:1 預言者の仲間の妻の一人がエリシャに叫んで言った。「あなたのしもべである私の夫が死にました。ご存じのように、あなたのしもべは【主】を恐れていました。ところが、債権者が来て、私の二人の子どもを自分の奴隷にしようとしています。」

4:2 エリシャは彼女に言った。「何をしてあげようか。私に話しなさい。あなたには、家の中に何かがあるのか。」彼女は答えた。「はしためには、家の中に何もありません。ただ、油の壺一つしかありません。」

4:3 すると、彼は言った。「外に行って、近所の皆から、器を借りて来なさい。空の器を。それも、一つや二つではいけません。」

4:4 家に入ったら、あなたと子どもたちの背後の戸を閉めなさい。そしてすべての器に油を注ぎ入れなさい。いっぱいになったものは、わきに置きなさい。」

4:5 そこで、彼女は彼のもとから去って行き、彼女と子どもたちが入った背後の戸を閉めた。そして、子どもたちが次々と自分のところに持って来る器に油を注ぎ入れた。

4:6 器がどれもいっぱいになったので、彼女は子どもの一人に言った。「もっと器を持って来なさい。」その子どもが彼女に、「もう器はありません」と言うと、油は止まった。

4:7 彼女が神の人に知らせに行くと、彼は言った。「行ってその油を売り、あなたの負債を払いなさい。その残りで、あなたと子どもたちは暮らしていけます。」

かつてエリヤが貧しいやもめの家庭で油を満たすという奇跡を行ないました。(その力は神からですが) その証はエリシャにも伝えられたのでしょうか。

彼の確信につながったと思われます。主のみわざは分かち合わねばなりません。教会でも恵を分かち合しましょう。

たくさんの器を用意するのは、主への信仰の表れです。そこは私たち人間が備えなくてはなりません。

戸を閉じるのは、主への一対一の信仰を明かにするためです。人が見ていなくても主に従う者の信仰は本ものです。

器がなくなると油も止まりました。器は信仰の大きさの表れですから、私たちは大きな信仰を持って、恵を受け取る用意をしましょう。

①神のみこころは？(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか？(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか？(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか)

④この世にあって何を実践しますか？



26日 水曜

列王Ⅱ

4:8 ある日、エリシャがシュネムを通りかかると、そこに一人の裕福な女がいて、彼を食事に引き止めた。それ以来、エリシャはそこを通りかかるたびに、そこに寄って食事をするようになった。

4:9 女は夫に言った。「いつも私たちのところに立ち寄って行かれるあの方は、きっと神の聖なる方に違いありません。

4:10 ですから、屋上に壁のある小さな部屋を作り、あの方のために寝台と机と椅子と燭台を置きましょう。あの方が私たちのところに来られるたびに、そこを使っただけですから。」

4:11 ある日、エリシャはそこに来て、その屋上の部屋に入って横になった。

4:12 彼は若者ゲハジに言った。「このシュネムの女を呼びなさい。」ゲハジが呼ぶと、彼女はゲハジの前に立った。

4:13 エリシャはゲハジに言った。「彼女にこう伝えなさい。『本当に、あなたはどのように、私たちのことで一生懸命骨折ってくれたが、あなたのために何をしたらよいか。王か軍の長に、何か話してほしいことでもあるか』と。」彼女はそれにこう答えた。「私は私の民の間で、幸せに暮らしております。」

4:14 エリシャが「では、彼女のために何をしたらよいだろうか」と言うと、ゲハジは言った。「彼女には子がなく、それに、彼女の夫も年をとっています。」

4:15 エリシャが、「彼女を呼んで来なさい」と言ったので、ゲハジが彼女を呼ぶと、彼女は入り口のところに立った。

4:16 エリシャは言った。「来年の今ごろ、あ



なたは男の子を抱くようになる。」すると彼女は言った。「いいえ、ご主人様。神の人よ、このはしのために偽りを言わないでください。」

4:17 しかし、この女は身ごもり、エリシャが彼女に告げたとおり、翌年のちょうどそのところに男の子を産んだ。

不従順の王たちのもで神のこばを取り次いだ預言者が「神の人」であったことを証しています。また民の中には預言者を尊んで主に従う者もいたことがわかります。

この「裕福な女」は霊的に目が開けた人で、エリヤが「神の聖なる人」であることを感じ、神のためにその人に協力したのです。主のためには直接の働き人も必要ですが、働き人を支える人も必要で、その優劣はありません。主に与えられているものは預かりものですから、それを用いて主のお役に立ちましょう。

エリシャは女の協力を当たり前とは思わず、主の恵が表れることを求めました。彼が自分の目的だけの実現を目指したのではなく、主のみこころの全体を願ったことがわかります。主のために互いに協力するなら、その恵は全体に及ぶのです。

この女は子がなかったのですが、それでも「しあわせに暮らしております。」と満足していました。主に与えられた人生や生活、状況を信仰ゆえに肯定的に捉えていたことがわかります。そして主のために生きるとき、主はさらなる恵、考えてもいかなかった恵みをくださるのです。

私たちは自分がその点でどうであるかを吟味して、主の恵の人生に歩んでいくものです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



4:18 その子が大きくなって、ある日、刈り入れをする者たちと一緒にいる、父のところに出て行ったとき、

4:19 父親に、「頭が、頭が」と言った。父親は若者に、「この子を母親のところに抱いて行ってくれ」と命じた。

4:20 若者はその子を抱き、母親のところに連れて行った。この子は屋まで母親の膝の上に休んでいたが、ついに死んでしまった。

4:21 彼女は屋上に上がって、神の人の寝台にその子を寝かせ、戸を開けて出て行った。

4:22 彼女は夫に呼びかけて言った。「どうか、若者一人と、雌ろば一頭を私のために出してください。私は急いで神の人のところに行つて、すぐに戻って来ますから。」

4:23 すると彼は、「どうして、今日あの人のところに行くのか。新月祭でもなく、安息日でもないのに」と言ったが、彼女は「かまいません」と答えた。

4:24 彼女は雌ろばに鞍を置き、若者に命じた。「手綱を引いて進みなさい。私が命じなければ、手綱を緩めてはいけません。」

4:25 こうして彼女は出かけて、カルメル山の神の人のところへ行った。神の人は、遠くから彼女を見つけると、若者ゲハジに言った。「見なさい。あのシュネムの女があそこに来ている。」

4:26 さあ、走って行って彼女を迎え、言いなさい。『あなたは無事ですか。あなたのご主人は無事ですか。お子さんは無事ですか』と。」彼女はそれにこう答えた。「無事です。」

4:27 それから彼女は山の上にいる神の人のと

ころに来て、彼の足にすがりついた。ゲハジが彼女を追い払おうと近寄ると、神の人は言った。「そのままにしておきなさい。彼女の心に悩みがあるのだから。【主】はそれを私に隠し、まだ私に知らせておられないのだ。」

4:28 彼女は言った。「私のご主人様に子どもを求めたでしょうか。この私にそんな気休めを言わないでくださいと申し上げたではありませんか。」

4:29 そこでエリシャはゲハジに言った。「腰に帯を締め、手に私の杖を持って行きなさい。たとえだれかに会っても、あいさつしてはならない。たとえだれかがあいさつしても、答えてはならない。そして、私の杖をあの子の頭の上に置きなさい。」

4:30 その子の母親は言った。「【主】は生きておられます。あなたのたましいも生きています。私は決してあなたを離しません。」エリシャは立ち上がり、彼女の後について行った。

4:31 ゲハジは二人より先に行つて、その杖を子どもの頭の上に置いたが、何の声もなく、何の応答もなかった。そこで引き返してエリシャに会い、「子どもは目を覚ましませんでした」と報告した。

4:32 エリシャが家に着くと、その子は寝台の上に死んで横たわっていた。

4:33 エリシャは中に入り、戸を閉めて、二人だけになって【主】に祈った。

4:34 それから、寝台の上になり上がり、その子の上に身を伏せ、自分の口をその子の口の上に、自分の目をその子の目の上に、自分の両手をその子の両手の上に重ねて、その子の上に身をかがめた。すると、その子の

からだ温かくなってきた。

4:35 それからエリシャは降りて、部屋の中をあちこちと歩き回り、また寝台の上になり上がり、子どもの上に身をかがめると、子どもは七回くしゃみをして目を開けた。

4:36 彼はゲハジを呼んで、「あのシュネムの女を呼んで来なさい」と言った。ゲハジが彼女を呼んだので、彼女はエリシャのところに来た。そこでエリシャは、「あなたの子どもを抱き上げなさい」と言った。

4:37 彼女は入って来て彼の足もとにひれ伏し、地にひれ伏した。そして、子どもを抱き上げて出て行った。

この女性は恨み言を言いつつも、神の人に頼り、主の力を求めました。困難のときには真っ先に主の前に出ましよう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたその部分の主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



4:38 エリシャがギルガルに帰って来たとき、この地に飢饉が起こった。預言者の仲間たちが彼の前に座っていたので、彼は若者に命じた。「大きな釜を火にかけ、預言者の仲間たちのために煮物を作りなさい。」

4:39 彼らの一人が食用の草を摘みに野に出て行くと、野生のつる草を見つけたので、そのつるから野生の瓜を前掛けにいっぱい取って帰って来た。そして、彼はそれを煮物の釜の中に刻んで入れた。彼らはそれが何であるかを知らなかった。

4:40 彼らは皆に食べさせようとして、これをよそった。皆はその煮物を口にするやいなや、こう叫んだ。「神の人よ、釜の中に毒が入っています。」彼らは食べることができなかった。

4:41 エリシャは言った。「では、麦粉を持って来なさい。」彼はそれを釜に投げ入れて言った。「これをよそって、この人たちに食べさせなさい。」そのときにはもう、釜の中には悪い物はなくなっていた。

4:42 ある人がバル・シャリシャから、初穂のパンである大麦のパン二十個と、新穀一袋を、神の人のところに持って来た。神の人は「この人たちに与えて食べさせなさい」と命じた。

4:43 彼の召使いは、「これだけで、どうして百人もの人に分けられるでしょうか」と言った。しかし、エリシャは言った。「この人たちに与えて食べさせなさい。【主】はこう言われる。『彼らは食べて残すだろう。』」

4:44 そこで、召使いが彼らに配ると、彼らは食べて残した。【主】のことばのとおりで

あった。

ききんがあっても王は、宮殿にいて豊かに食べられたでしょうが、預言者は違います。エリシャも多くの後継者を育てながら、彼らの生活までも面倒を見て活動しました。主のみこころを行う者は、単に真理を伝達するだけではなく、人々の生活や心にも寄り添う必要があります。本当の「神の人」とは、ききんのような苦難に際しても、共に生きる人です。

ここに記された毒の出来事と、パンの出来事は様々な解釈があります。「毒が入って」とあるのは言語では「死が入って」という意味ですから、毒は比喩的な表現で、強烈な苦さを表しているのかもしれませんが。また研究者によればコロシントウリという植物で、だとすれば薄めれば食も可能なようです。しかしこれを超自然的な主のわざと考えると差し支えないでしょう。パンも20個を100人で分けるのですから、大きさによっては奇跡とは言えないかもしれません。

解釈は一つではありませんが、ここで明確になるのは、エリシャの信仰と人柄です。ききんを弟子たちと共に苦労して乗り越え、知恵と知識をフル回転させ、主の奇跡にも期待しました。また自分にもらった「初穂のパンも」、全員には足りないからと言って自分のものにするのではなく、むしろそれを分け合うことを学ばせているようでもあります。

主のみわざはこように、多くの現実的な出来事の中で、主の目的と主のみこころに生きる人々によってなされてゆくのです。現代でも列王記の時代と同じく、有力者は神をないがしろにする人々かもしれません。しかし私たちは現実の中で、信仰と希望と愛を実践しつつ前進しましょう。その希望は、5000人にパンを与えられた主イエスから与えられます。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にも適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



5:1 アラムの王の軍の長ナアマンは、その主君に重んじられ、尊敬されていた。それは、【主】が以前に、彼を通してアラムに勝利を与えられたからであった。この人は勇士であったが、ツアラアトに冒されていた。

5:2 アラムはかつて略奪に出たとき、イスラエルの地から一人の若い娘を捕らえて来ていた。彼女はナアマンの妻に仕えていた。

5:3 彼女は女主人に言った。「もし、ご主人様がサムリアにいる預言者のところに行かれたら、きっと、その方がご主人様のツアラアトを治してくださるでしょう。」

5:4 そこで、ナアマンはその主君のところに行き、イスラエルの地から来た娘がこれこれのことを言いました、と告げた。

5:5 アラムの王は言った。「行って来なさい。私がイスラエルの王に宛てて手紙を送ろう。」そこで、ナアマンは、銀十タラントと金六千シェケルと晴れ着十着を持って出かけた。

5:6 彼はイスラエルの王宛ての次のような手紙を持って行った。「この手紙があなたに届きましたら、家臣のナアマンをあなたのところに送りましたので、彼のツアラアトを治してくださいますように。」

5:7 イスラエルの王はこの手紙を読むと、自分の衣を引き裂いて言った。「私は殺したり、生かしたりすることのできる神であろうか。この人はこの男を送って、ツアラアトを治せと言う。しかし、考えてみよ。彼は私に言いがかりをつけようとしているのだ。」

5:8 神の人エリシャは、イスラエルの王が衣を引き裂いたことを聞くと、王のもとに人を

遣わして言った。「あなたはどのように衣を引き裂いたりなさるのですか。その男を私のところによこしてください。そうすれば、彼はイスラエルに預言者がいることを知るでしょう。」

5:9 こうして、ナアマンは馬と戦車でやって来て、エリシャの家の入り口に立った。

5:10 エリシャは、彼に使者を遣わして言った。「ヨルダン川へ行って七回あなたの身を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだは元どおりになって、きよくなります。」

5:11 しかしナアマンは激怒して去り、そして言った。「何ということだ。私は、彼がきつと出て来て立ち、彼の神、【主】の名を呼んで、この患部の上で手を動かし、ツアラアトに冒されたこの者を治してくれると思っていた。」

5:12 ダマスコの川、アマナやパルパルは、イスラエルのすべての川にまさっているではないか。これらの川で身を洗って、私がきよくなれないというのか。」こうして、彼は憤って帰途についた。

5:13 そのとき、彼のしもべたちが近づいて彼に言った。「わが父よ。難しいことを、あの預言者があなたに命じたのでしたら、あなたはきつとそれをなさったのではありませんか。あの人は『身を洗ってきよくなりなさい』と言っただけではありませんか。」

5:14 そこで、ナアマンは下って行き、神の人が言ったとおりに、ヨルダン川に七回身を浸した。すると彼のからだは元どおりになって、幼子のからだのようになり、きよくなった。

ツアラアトとは以前はらい病（ハンセン病）と訳されていましたが、実際は病名を特定できないので、原語のまま表記されています。皮膚の疾患を伴うものであることは確かです。

ナアマンは地位も名声もある大將軍でしたが、見えなところは弱く病んでしました。これは人間の現実を表しています。一度は憤慨した彼も、へりくだって従ったときに主の恵は表れました。

それをもたらしたのは、奴隷のイスラエルの娘であったことを思うと、私たちもどんな立場でも、その人のために思いつつ伝道したいものです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



5:15 ナアマンはその一行の者すべてを連れて神の人のところに引き返して来て、彼の前に立って言った。「私は今、イスラエルのほか、全世界のどこにも神はおられないことを知りました。どうか今、あなたのしもべからの贈り物を受け取ってください。」

5:16 神の人は言った。「私が仕えている【主】は生きておられます。私は決して受け取りません。」ナアマンは、受け取らせようとしてしきりに勧めたが、神の人は断った。
5:17 そこでナアマンは言った。「それなら、どうか二頭のらばに載せただけの土をしもべに与えてください。しもべはこれからはもう、【主】以外のほかの神々に全焼のささげ物やいけにえを献げません。」

5:18 どうか、【主】が次のことについてしもべをお赦しくくださいますように。私の主君がリンモンの神殿に入って、そこでひれ伏すために私の手を頼みにします。それで私もリンモンの神殿でひれ伏すとき、どうか、【主】がこのことについてしもべをお赦しくくださいますように。」

5:19 エリシャは彼に言った。「安心して行きなさい。」そこでナアマンは彼から離れ、かなりの道のりを進んで行った。

5:20 そのとき、神の人エリシャに仕える若者ゲハジはこう考えた。「何としたことか。私の主人は、あのアラム人ナアマンが持って来た物を受け取ろうとはしなかった。【主】は生きておられる。私は彼の後を追いかけて、絶対に何かをもらって来よう。」

5:21 ゲハジはナアマンの後を追いかけ行って

た。ナアマンは、うしろから駆けて来る者を見つけると、戦車から降りて彼を迎え、「何か変わったことでも」と尋ねた。

5:22 そこで、ゲハジは言った。「変わったことはありませんが、私の主人は私を送り出してこう言っています。『たった今、エフライムの山地から、預言者の仲間の二人の若者が私のところにやって来たので、どうか、銀一タラントと晴れ着二着を彼らに与えてやってください。』」

5:23 するとナアマンは、「ぜひ、ニタラントを取ってください」と言ってしきりに勧め、二つの袋に入れた銀ニタラントと、晴れ着二着を自分の二人の若者に渡した。そこで彼らはそれを背負ってゲハジの先に立って進んだ。

5:24 ゲハジは丘に着くと、それを二人の者から受け取って家の中にしまい込み、彼らを帰らせたので、彼らは去って行った。

5:25 彼が家に入って主人の前に立つと、エリシャは彼に言った。「ゲハジ。おまえはどこへ行って来たのか。」彼は答えた。「しもべはどこへも行っていません。」

5:26 エリシャは彼に言った。「あの人がおまえを迎えに戦車から降りたとき、私の心はおまえと一緒に歩んでいたではないか。今は金を受け、衣服を受け、オリーブ油やぶどう畑、羊や牛、男女の奴隷を受ける時だろうか。」

5:27 ナアマンのツアラアトは、いつまでもおまえとおまえの子孫にまといつく。」ゲハジはツアラアトに言され、雪のようになって、エリシャの前から去って行った。

「主に」礼拝する祭壇を築くためでした。彼のうちに主が働かずばらしいみわざが起こされたのです。エリシャは主のわざと知っていましたので、それで自分に贈り物をもらうことを断りました。主の働き人は一般に、働きの報酬として生活が保証されるのであって、奇跡のみわざの代金によるのではないのです。

また「今は…受ける時だろうか。」とあるので、偽預言者との区別のため、また主に純粋に栄子をお返しするために、エリシャはゲハジに贈り物の受け取りを禁じたと思われる。主のみわざを自分の損得につなげていないか、吟味しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

